



夏にぴったりの駅？
 関東鉄道常総線の小絹駅のホームから撮影した写真です。この駅の片側のホームには待合室の横に大きな木が一本立っています。それが何とも言えない風情を醸し出して、夏にはぴったりの駅。ランニングシャツで麦わら帽子に虫取り網を持った少年が今にも表れそうな雰囲気なんです。(ちよっと時代遅れ?)
 暑さの中にも心地よい風が頬を撫でるこの駅に暫く佇んでいたい心境にかられました。

ヨシナカ新聞

絶叫アトラクションマシン
 グ

1	FUJIYAMA	富士急ハイランド
2	ドドンパ	富士急ハイランド
3	ええじゃないか	富士急ハイランド
4	タワー・オブ・テラー	TDS
5	ビッグサンダー・マウンテン	TDL
6	スプラッシュ・マウンテン	TDL
7	ハリウッド・ドリーム・ザ・ライド	USJ
8	インディ・ジョーンズ・アドベンチャー	TDS
9	レイジングスピリッツ	TDS
10	センター・オブ・ジ・アース	TDS

風をきって大声を張り上げて気分爽快、ストレス発散！
 goooランニングから、日本全国にある絶叫アトラクションの中から一度はチャレンジしてみたいベスト10です。
 FUJIYAMAは最大時速130キロメートル、最大落差70メートルだそうです。考えただけで心臓がドキドキします。が、ワクワクも！

ステンレス豆知識
 ステンレスは綺麗にしておきましょう！
 ステンレスキッチンのシンクの上に空き缶を置いていると空き缶の底が錆びて、ステンレスに丸く錆びが付きまします。これを『もらい錆び』といひます。この段階なら、清掃材で錆びを除去すれば問題ありませんが、放置しておくと、ステンレスの健全な不動態皮膜の保持に必要な酸素の供給不足の為、不動態被膜が破壊されステンレス自体が錆びてしまひます。この時、多少素地が食われるので、錆を除去してもヘアピンや鉄の剃刀の刃も同じ結果になります。
 流し台や浴槽に限らず、ステンレス製品をさびや腐食から守るには、中性洗剤などを使ってきれいにしておくことがポイントです。

K社員のピアノ奮戦記
 第四十四話 F先生の囃し！
 F先生はもともとクラリネット専門で、大学卒業後オーケストラに所属される事も決まっていた矢先、交通事故に遭われ、右腕の腱を切断されて、オーケストラを残念せざるをえなくなつたそうです。
 約一年にわたる苦しいリハビリの中、ようやくクラリネットを演奏出来るようにはなつたものの、長時間の演奏に腕が耐えられなくなつてしまつたので、オーケストラは諦めて、クラリネットやピアノの講師をされた後、私が習っている楽器店の

ピアノのインストラクターになられました。
 そんな辛い思いを経験されたF先生、普段はともひょうきんで明るいのですが、サントリーホールでの発表会のリハーサル室で私がサビの部分が大弾けなくなつた時に、大きな声で「絶対に弾けます！」と叫ばれ、我に返つた私は本番ではなんとか止まらずに弾く事が出来ました。

また翌年(平成19年)6月の発表会でも、頭が真っ白になつて最初から何度やつても弾けなくなつてしまつた私に、大声で「弾けますっ！」と一喝され、びっくりした私は、「ハイっ」と言わんばかりに、何事もなかったようにスラスラと弾き始め、最後まで弾いてしまつたという事もありません。
 そんな不思議なF先生からは約一年教えて頂きましたが、平成19年夏、結婚の為退職されました。

紙を突くと雪が飛び出たので、紙を動かさないので、その手紙を川口冴子(旧姓雪山)さんが受け取つた時の状況が冒頭の文章です。この手紙を読んで、間違いなく当時の若佐少年であると確信した川口冴子さんは、彼に返事を書きます。
 この本は、川口冴子さんと若佐氏の往復書簡(文通)のやりとりをメインに記されているのですが、手紙のやりとりをしていくうちに、当時彼女が書いていた200ページにわたる教生日記が出て来て、当時の事がリアルに表現されていきます。その文章で雪山先生がどれだけ生徒達の事を可愛く思っていたか、また生徒達も礼儀正しさの中でとても先生の事を慕つていた事がストレートに伝わって来ます。番組の再現映像を観ているうちに、昔観た映画『二十四の瞳』とオーバーラップしてしまひ涙してしまひました。今、この本を読み終えて、改めて感動を味わうと同時に、私が9歳の時に、郡山小学校(奈良県大和郡山市)に新卒で来られ、私のクラスの担任になられた先生の事を思い出しました。先生は2年間担任をされた後、神奈川県にお嫁に行かれました。今何処にいらつしやるのかわかりませんが、先生に無性にお会いしたいくなりました。

昭和19年6月、太平洋戦争激化の中、奈良県女子高等師範学校(現奈良女子大学)付属小学校4年生の男子クラスにやってきました教育実習生(当時教生先生)に、生徒であつた9歳の岩佐寿弥少年は恋をしてしまひます。実習期間3ヶ月という短い期間ではあつたものの、19歳の教生先生(雪山冴子先生)との楽しく切ない思い出が残りまします。
 そして60年後、岩佐さんが偶然見たドキュメンタリー番組中に、かつての雪山先生を見つけたので、紙を動かさないので、その手紙を川口冴子(旧姓雪山)さんが受け取つた時の状況が冒頭の文章です。この手紙を読んで、間違いなく当時の若佐少年であると確信した川口冴子さんは、彼に返事を書きます。

あの夏少年はいた
 (本の紹介)
 2003年9月24日、姫路市在住の川口冴子宅の郵便受けに、分厚い一通の手紙が舞い込んだ。宛名は川口冴子とあるが、冴子には、東京都練馬区光が丘・岩佐寿弥と書かれたこの手紙の差出人に覚えがない。
 この文章から始まる「あの夏、少年はいた」(川口冴子、岩佐寿弥筆、れんが書新社)という本に出会つたのは、今年の8月初め頃に何気なくテレビのチャンネルをひねつていた時に放映されていた「あの夏、60年目の恋文」という番組を観たのがきっかけでした。
 昭和19年6月、太平洋戦争激化の中、奈良県女子高等師範学校(現奈良女子大学)付属小学校4年生の男子クラスにやってきました教育実習生(当時教生先生)に、生徒であつた9歳の岩佐寿弥少年は恋をしてしまひます。実習期間3ヶ月という短い期間ではあつたものの、19歳の教生先生(雪山冴子先生)との楽しく切ない思い出が残りまします。
 そして60年後、岩佐さんが偶然見たドキュメンタリー番組中に、かつての雪山先生を見つけたので、紙を動かさないので、その手紙を川口冴子(旧姓雪山)さんが受け取つた時の状況が冒頭の文章です。この手紙を読んで、間違いなく当時の若佐少年であると確信した川口冴子さんは、彼に返事を書きます。